



沖島

前島

井口喜景

松田 繁

大村 陸

寺井崇浩

中井 均

残石

第8回とよはしシンポジウム 三河湾の残石

吉田城と名古屋城の石垣

参加無料
(申込不要)

定員 600名

2025年 11月22日(土)

名古屋城築城の際に三河湾で切り出され、現在も現地に残されている石垣石材「残石」。この残石と名古屋城、残石を利用した吉田城を通して、三河湾産石材の城郭利用について考えます。

開場 12:00 開会 13:00 会場 豊橋市公会堂

- 12:00 開場・受付開始 (豊橋市八町通二丁目22) 豊橋鉄道市内線「市役所前」下車すぐ
- 13:00～13:05 開会あいさつ
- 13:05～13:35 「石丁場のあり方ー海の丁場、山の丁場ー」
中井 均 (滋賀県立大学名誉教授)
- 13:35～14:05 「西尾市の残石と石割奉行」井口喜景 (西尾市文化財課学芸員)
- 14:05～14:35 「蒲郡市の残石」松田 繁 (蒲郡市博物館学芸員)
- 14:35～14:45 休憩
- 14:45～15:15 「名古屋城の石垣と三河湾」大村 陸 (名古屋城調査研究センター学芸員)
- 15:15～15:45 「近世吉田城の石垣と三河湾」寺井崇浩 (豊橋市文化財センター学芸員)
- 15:45～16:00 休憩
- 16:00～16:45 座談会「三河湾と城郭石垣について」
司会：安田 暖 (エフエム豊橋)、中井 均 (滋賀県立大学名誉教授)
- 16:45～16:50 閉会あいさつ

豊橋市美術博物館 関連企画

石垣を解体(バラ)して分かったこと

- 会期：11月1日(土)～12月7日(日) 観覧無料
- 月曜休館 (11月3日・24日は前期し翌日休館)
- びくく講座：「石垣を解体(バラ)して分かったこと」担当：中川 永 (美術博物館学芸員)
- 日程：11月15日(土) ※申込みは10月1日(水)より
- 資料代100円。詳細は美術博物館HPをご覧ください。



第8回とよはしシンポジウム

三河湾の残石—吉田城と名古屋城の石垣—

日時：令和7年11月22日（土）13：00～16：50

会場：豊橋市公会堂

【プログラム】

- 13：00～13：05 開会あいさつ
- 13：05～13：35 「石丁場のあり方—海の丁場、山の丁場—」・・・・・・・・・・P1～6
中井 均（滋賀県立大学名誉教授）
- 13：35～14：05 「西尾市の残石と石割奉行」・・・・・・・・・・P7～12
井口喜景（西尾市文化財課学芸員）
- 14：05～14：35 「蒲郡市の残石」・・・・・・・・・・P13～18
松田 繁（蒲郡市博物館学芸員）
- 14：35～14：45 休憩（10分）
- 14：45～15：15 「名古屋城の石垣と三河湾」・・・・・・・・・・P19～24
大村 陸（名古屋城調査研究センター学芸員）
- 15：15～15：45 「近世吉田城の石垣と三河湾」・・・・・・・・・・P25～29
寺井崇浩（豊橋市文化財センター学芸員）
- 15：45～16：00 休憩（15分）
- 16：00～16：45 座談会「三河湾と城郭石垣について」
司会：安田 暖（エフエム豊橋）・中井 均
パネリスト：井口喜景
松田 茂
大村 陸
寺井崇浩
- 16：45～16：50 閉会あいさつ

石丁場のあり方 -海の丁場、山の丁場-

滋賀県立大学名誉教授 中井 均

◆はじめに

- ・慶長の築城ラッシュ ⇒ 関ヶ原合戦後の大名の大移動【新たな領国において新たな居城の築城】
※さらに国主大名は領国内に支城も築いた
「天守御成就、今年日本国中ノ天主教二十五立」⇒ 慶長14年(1609)に造営された天守は25城に及んだ(『直茂公譜考補』)
- ・慶長の築城 ⇒ 基本的には石垣の築城となる【石材の調達技術と石積みの技術】
※石を切り、運び、積み上げる

◆石垣普請

- ・永禄6年(1563)の織田信長による小牧山築城 ⇒ 墨書された石垣石材の出土【「佐久間」の墨書は割普請を示すものか】
- ・天正4年(1576)の織田信長による安土築城 ⇒ 墨書された石垣石材の出土【「惟住内九口」の墨書は割普請を示すものか】
- ・公儀普請(天下普請) ⇒ 「慶長六年辛丑六月諸国守に命じて江州膳所崎に城を築かしめ給ふ。奉行八人之を監す。天下普く治め給ふ後城を築かしむるの始也」(『家忠日記』)【公儀普請の第1号で、縄張りは藤堂高虎がおこなう】
以後、加納城(慶長7年)、彦根城(慶長9年)、長浜城(慶長10年)、篠山城(慶長14年)、亀山城(慶長14年)、名古屋城(慶長15年)、大坂城(元和6年)と続く
- ・自然石から割石へ ⇒ 自然石を積む野面積みから割石を用いた打込接へ【さらに規格寸法に合わせた割石(切石を用いた切石積みへ)】
※野面積みにも租割りによって割られた割石や矢穴技法によって割られた(切られた)割石が認められる場合がある【用語の再検討】
- ・墨書(朱書き)から刻印へ ⇒ 慶長の築城ラッシュに伴い石垣石材には様々な符号が刻まれるようになる【持ち運んだ大名や、積んだ大名の家紋や略紋を中心に様々な文様や文字が刻まれる】
※最古の刻印? ⇒ 京都東山の豊国神社参道敷石【京都大仏(方広寺)に用いられたものか】
京都大仏殿の発掘調査 ⇒ 築地基壇が検出される【その基壇石にも刻印が刻まれていた】
- ・石垣石材だけではなく、石丁場にも刻まれる ⇒ 刻印は石丁場で刻まれたものと、築城時

に普請現場で刻まれたものが混在する【丁場に刻まれたものは採石担当区域を明示していることなどが考えられる】

※刻印が刻まれるようになって墨書や朱書きも存続する

◆名古屋築城

- ・慶長 14 年(1609)に名古屋築城を発令 ⇒ 清洲城から名古屋城へ【慶長 15 年に西国大名を中心に 20 大名に普請の助役を命じる】
- ・天守台の助役 ⇒ 加藤清正【天守台石垣の刻印「加藤肥後守内小代下総」「加藤肥後守内 中川太良平】】
- ・石材 ⇒ 石崎山、篠島、幡豆、紀伊、小豆島などから切り出す【小牧山城跡、船木山古墳群などの石材も転用される】
- ・幡豆の石丁場 ⇒
沖島、前島の島嶼部の石丁場【花崗閃緑岩であるがあまり良品の石材ではない】
八貫山の山の石丁場【班れい岩で島嶼部の石材に比べると良品の石材】
石曳道らしき地形も確認できる
- ・城跡や古墳群の石丁場 ⇒
小牧山城跡の石丁場【チャートの石材は残され、花崗岩のみ搬出された】
発掘調査によって石曳道の整地も確認されている
船木山古墳群の石丁場【横穴式石室の天井石はほとんど搬出されている】

◆大坂築城

- ・「御内談の上、大坂の故墟を改められ、池(堀)の深さ、石垣の高さ旧時に増し、諸大名に丁場わり付」(『高山公実録』) ⇒ 豊臣大坂城を超える大坂築城【日本最大の城郭】
- ・徳川幕府が諸大名に命じて築城 ⇒ 公儀普請(天下普請)
再建の手順 ⇒ 3 期にわたる工期
第 1 期[西外堀・北外堀・東外堀] ⇒ 元和 6 年(1620)～【31 ヶ国 48 大名】
第 2 期[内堀・天守台] ⇒ 寛永元年(1624)～【32 ヶ国 57 大名】
第 3 期[南外堀] ⇒ 寛永 5 年(1628)～寛永 6 年(1629)【32 ヶ国 52 大名】
- ・徳川大坂城に用いられた石材 ⇒ 2～400 万個の石材総数【ほぼすべてが花崗岩】
石丁場の適合条件 ⇒ ①需要に見合う法量の石材の調達が可能、②数量の確保、③材質の良さ、④運搬の至便さ
 - 1)幕府領小豆島 ⇒ 岩谷丁場、福田丁場、小部片桐ろくろ丁場、小海丁場、小瀬・千軒丁場【海岸丁場】
 - 2)塩飽諸島
 - 3)牛窓町前島 ⇒ 松江藩堀尾家、鳥取藩池田光政の石丁場で「岩くだし」「丁場」地名が残る【「備前国犬島の石をお貰いありて】】
 - 4)犬島 ⇒ 池田忠雄【良質の花崗岩】
 - 5)讃岐庵治

6)周防大津島

7)伏見城跡 ⇒ 元和5年(1619)の廃城に伴う石垣石材の転用

8)加茂 ※鳶ヶ城跡に残る矢穴の残る花崗岩【山の丁場】

9)笠置 ※木津川に沈む加工された花崗岩

10)生駒西麓 ⇒ 「大坂城残石」「大坂城残念石」【生駒石】

11)幕府領六甲(御影・芦屋) ⇒ 徳川大坂城の石垣石材の半数以上【山の丁場】

現在7群が知られる ⇒ 築石の切り出し中心

◆江戸築城

- ・慶長8年(1603)、公儀普請(天下普請)による江戸城修築 ⇒ 助役として70大名が13組に編成されて動員される【諸大名に所領石高1,000石につき1人の割合で人夫をだす「千石夫」】
- ・慶長9年(1604)、石材を運送するための石船の調達を命じる ⇒ 28大名と堺の豪商尼崎又次郎【黒田長政150艘、浅野幸長385艘、尼崎又次郎100艘】
所領10万石につき「百人持之石」を1,120玉の差出を命じる【百人持之石とは人夫100人で運搬できる石=約4トンの石】
- ・慶長11年(1606)の修築工事では25家の大名に石垣の修築が命じられる
- ・慶長12年(1607)の修築工事では関東・奥羽・信越の10家の大名が動員される
- ・慶長19年(1614)の修築工事では34家の大名に石垣の修築が命じられる
- ・元和6年(1620)の修築工事では11家の大名に石垣の修築が命じられる
- ・元和8年(1622)の修築工事では天守台が改修される【竣工は元和9年(1623)】
- ・寛永の修築工事 ⇒ 寛永元年(1624)、寛永4年(1627)、寛永6年(1629)、寛永12年(1635)、寛永13年(1636)の5回にわたる工事【惣構の完成】
- ・寛永15年(1638)の天守台改築
- ・江戸城の石垣石材 ⇒ 安山岩が主体【真鶴系安山岩(箱根火山)、宇佐見-多賀系安山岩(宇佐見火山)】、東伊豆系安山岩【天城火山】
- ・江戸城天守台 ⇒ 寛永の天守が明暦3年(1657)に焼失し、翌年に加賀藩前田綱紀により再建される【「只今迄ハ御天守台伊豆石なるを、此度角脇石平石迄残らず根二番石なり上の分見影石(御影石)に可被遊由。扱前々御天守台伊豆石之分は、外の石垣の所へ足し石に可被成候とて」(『後見草』)瀬戸内海の犬島もしくは小豆島の花崗岩を使用】

◆海の丁場、山の丁場

- ・慶長の築城ラッシュは大量の石垣石材を必要とした ⇒ 良質の石材にこだわってはいられない【古城や古墳の石室まで持ち運ぶ】
- ・矢穴技法により石材の安定した供給が可能となる ⇒ 運搬が問題となる【特に巨大な鏡石や隅石】
運搬を視野に入れた海に面した石丁場 ⇒ 船による大量運搬

良質な石材もしくは、石垣に適した石材として山の丁場 ⇒ 運搬は困難

- ・名古屋城における幡豆の島嶼部の石丁場 ⇒ 良質ではないが大量の石材供給地として運搬しやすい海の丁場が選ばれた

◆おわりに

- ・割普請とは石垣普請そのもの ⇒ 大名を助役として動員【命じられた大名は石材の供出、運搬、積み上げのことをしなければならなかった】

一方、作事(建築)については割作事は存在しない ⇒ 作事は専門集団に任せたものか【材木は供出させた】

石垣普請の主体は誰か ⇒ 慶長の築城ラッシュをまかなえる石工集団は存在しない【採石、運搬、積み上げの大半は足軽・雑兵が動員された】

- ※豊臣秀吉の前期伏見城(指月城)では「伏見御普請割之儀」、「伏見御普請衆」、「伏見御作事衆」と記されている(『駒井日記』)

- ・慶長の築城ラッシュを可能としたもの ⇒ 大量の石材を供給出来るようになった【矢穴技法による規格寸法の石材の切り出し、運搬、積み上げる技術】

織豊系城郭の築城、特に秀吉による巨大な平城築城による技術の収斂【肥前名護屋城、朝鮮半島の倭城の石垣築城が多大な影響を与えた】

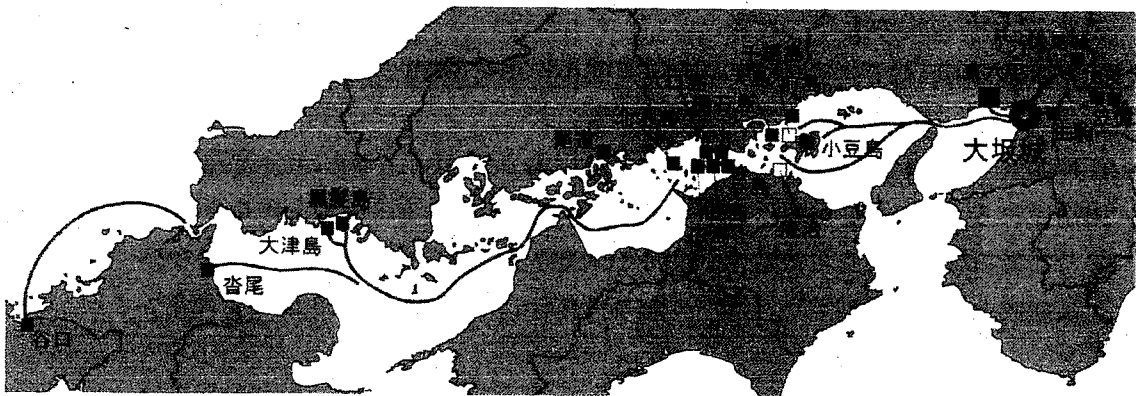


図1 徳川大坂築城に用いられた石材の調達(『瀬戸内・小豆島 石のシンポジウム 2015』)

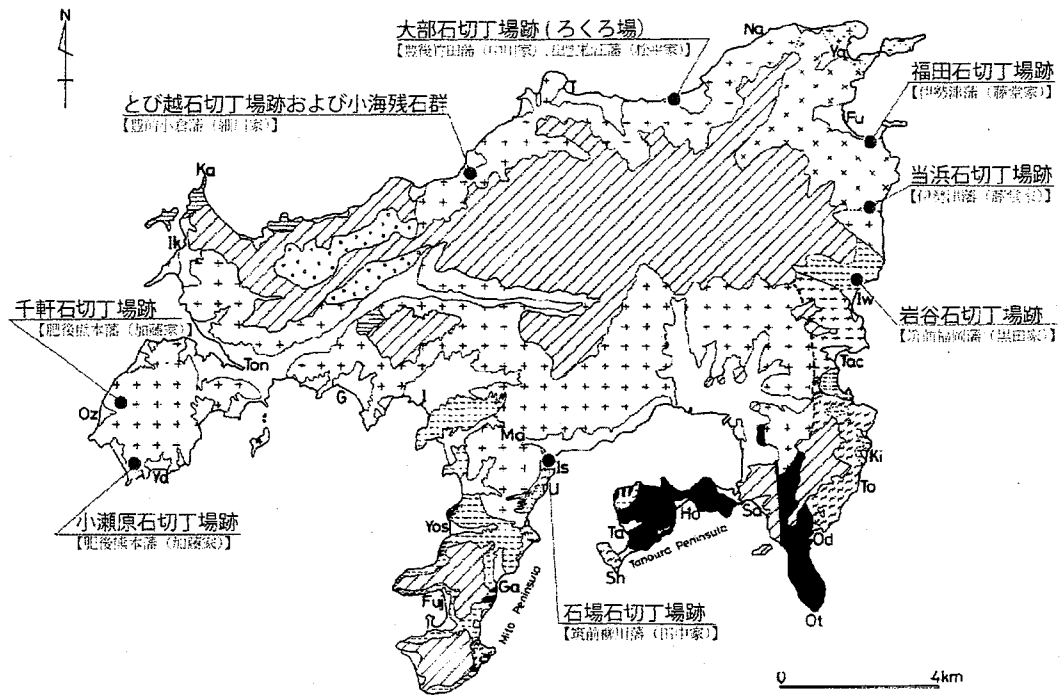


図2 小豆島の地質と石丁場の位置図(『小豆島 石の魅力創造シンポジウム』)

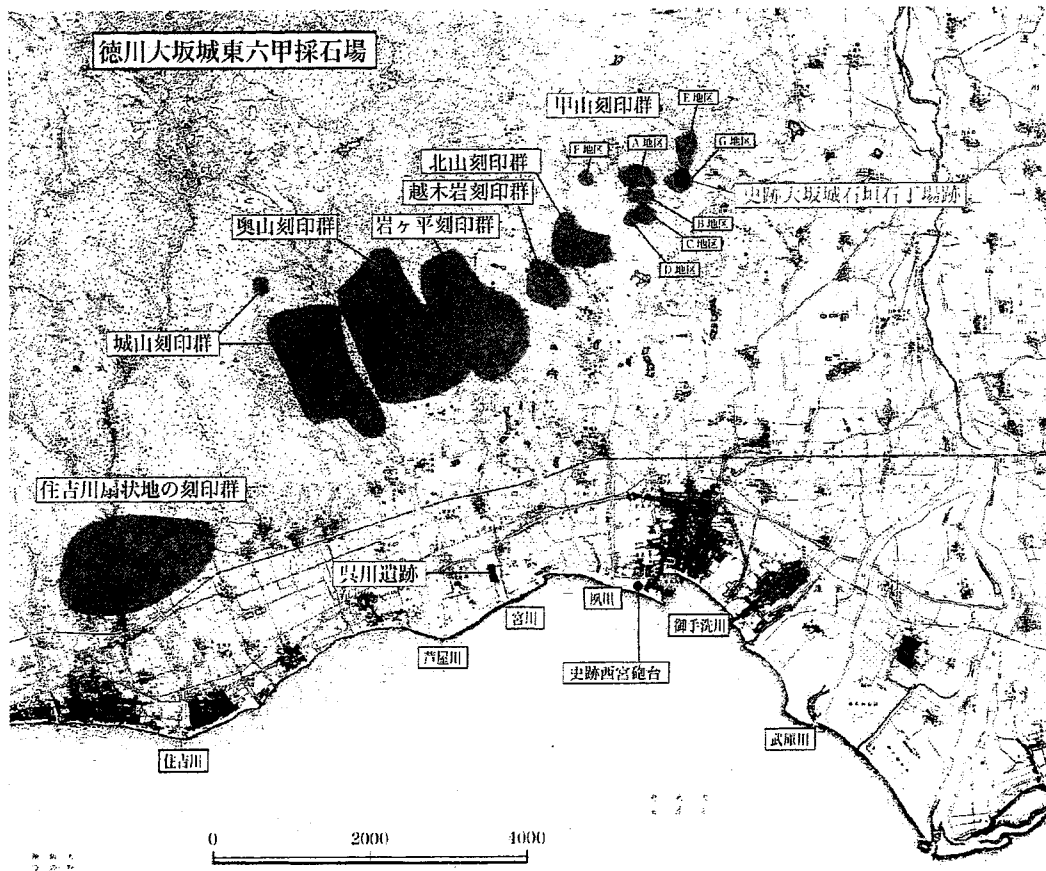


図3 徳川大坂城東六甲採石場位置図(『史跡大坂城石垣石丁場跡東六甲石丁場保存活用計画策定報告書』)

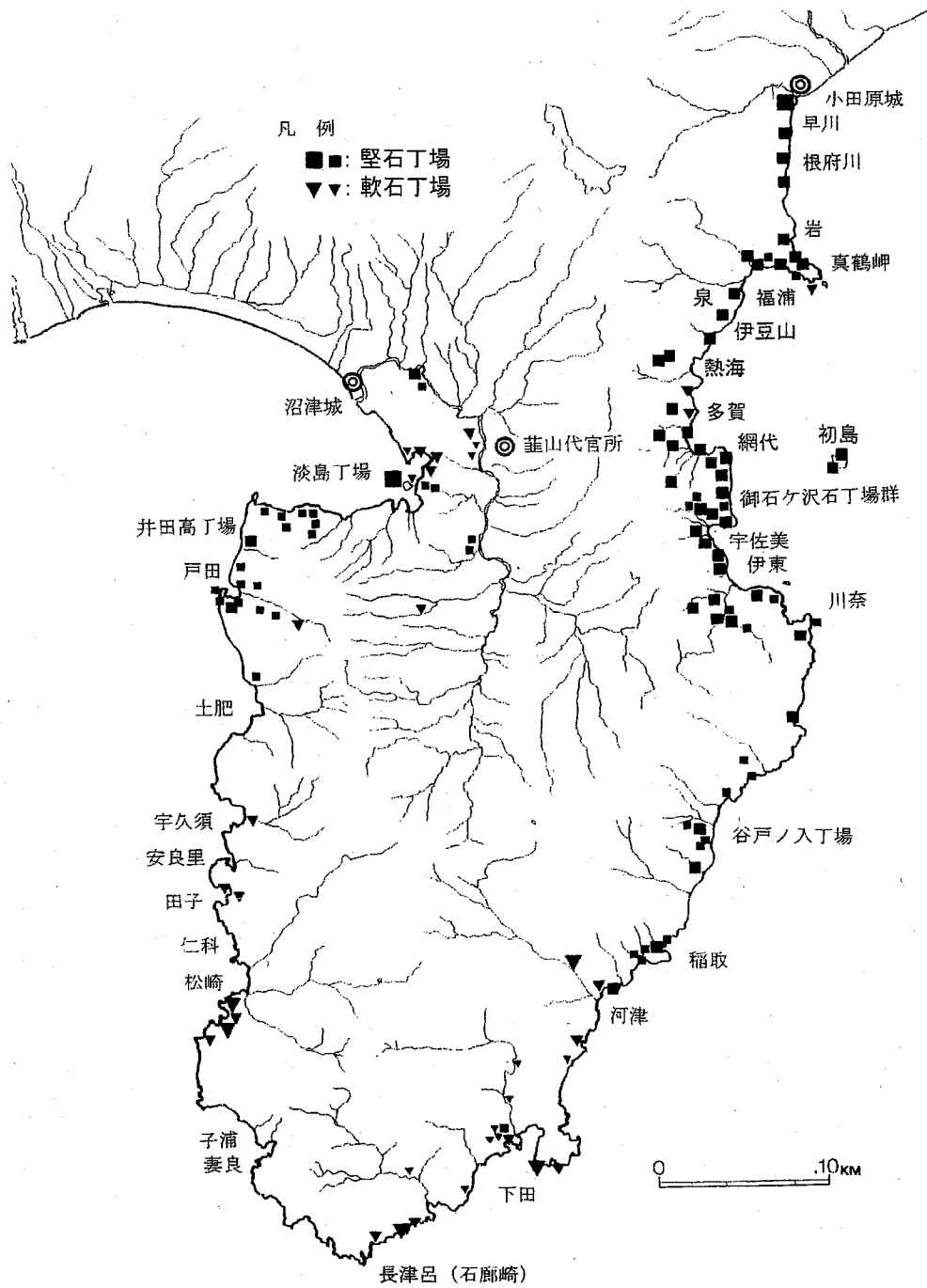


図4 江戸城伊豆石丁場遺跡分布図(『熱海市内伊豆石丁場遺跡確認調査報告書』)

西尾市の残石と石割奉行

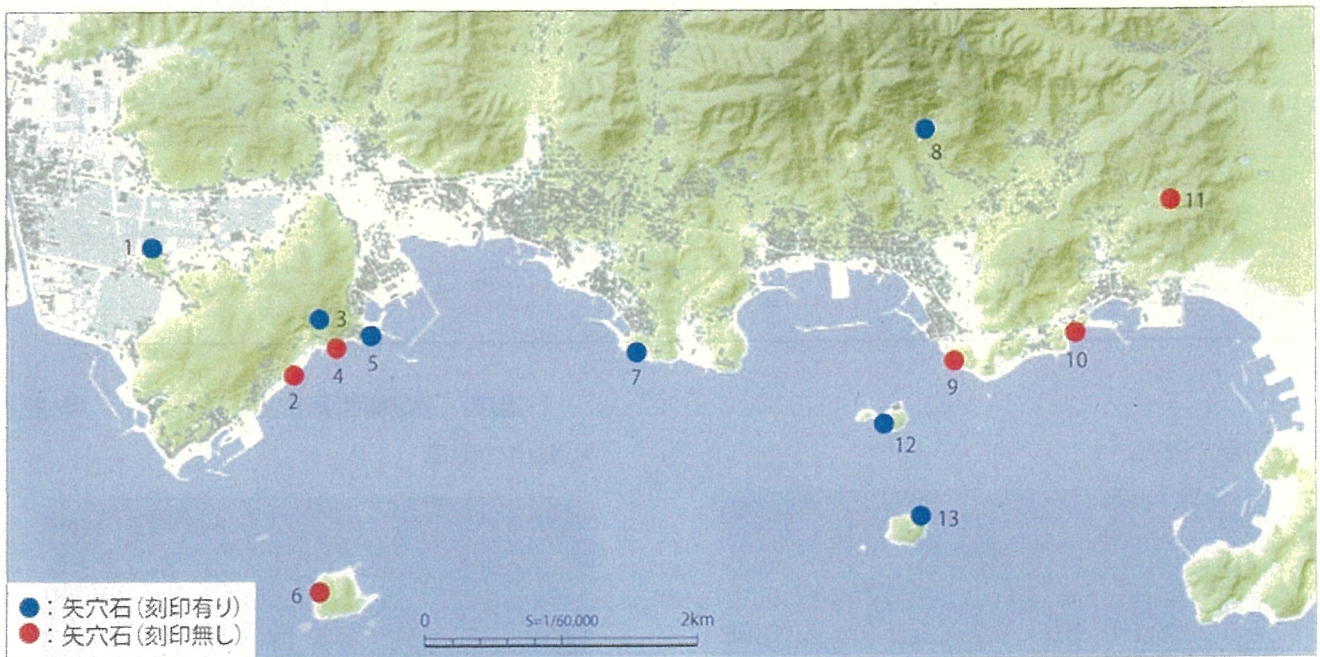
井口 喜景（西尾市教育委員会文化財課 学芸員）

1. 西尾市内における名古屋城築城時の残石

(1) 矢穴石の分布

西尾市幡豆地区は三ヶ根山や愛宕山、見影山などの山並みが続く北半部は領家帯の領家変成岩類で、前島や沖島などの島嶼をも含めた三河湾沿岸部は主として古期領家花こう岩類で構成されています。それらは石英閃緑岩や黒雲母花こう閃緑岩に分類され、通称「幡豆石」と呼ばれています。幡豆石は普通の花こう岩よりも重量があり、また肌き理めも粗くて割った時の表面がでこぼこしていて滑りにくい性質があります。こうした石質の特徴を生かして、幡豆石は古くから石垣の築石や海岸・河川堤防の護岸用石材として用いられてきました。

三河湾沿岸部の吉良地区の宮崎海水浴場や梶島、幡豆地区の鳥羽崎山海岸や田尻海岸、寺部海岸、東幡豆西丸山海岸や中ノ浜海岸、洲崎海岸、前島、沖島などには、名古屋城まで運ばれなかった多くの残石が残っています。幡豆地区における残石の分布については、『幡豆町史 資料編1』（2008）に示されているが、矢穴石はこうした海岸部のみでなく、海岸からやや奥に入った丘陵部の鳥羽町八貫山、東幡豆町紺屋谷戸の薬師堂周辺・長根の証文岩付近や桑畑山、愛知こどもの国あさひが丘ぼうけん広場付近、吉良町乙川の正法寺古墳北側などでも確認されています。



出典：『新編西尾市史 資料編1 考古』

(2) 矢穴石に残る刻印

① 正法寺古墳（吉良町乙川）

正法寺古墳北側の道路沿いに残された残石には、「一の文字と輪に収めた七の文字」の刻印が2ヶ所にあります。乙川地区周辺の岩脈は斑れい岩（ガブロ）で、沿岸部の岩脈（花こう閃緑岩）と比べ

るとやや黒っぽくて幾分鉄分を含んでいます。近年、乙川地区では新たな残石の発見が相次いでいます。

②八貫山（鳥羽町）

八貫山の頂上付近に「生駒車」「丸にふたつ巴」「違い山形」「輪鼓」などの刻印をはじめ、多数の残石が確認されています。

③前島（東幡豆町）

令和6年度の調査で、「角に大の字」「角轡」「三輪違い」「鱗に点」「丸に出十字」の刻印が確認されています。名古屋城の刻印と比較すると、「角に大の字」「鱗に点」「丸に出十字」の刻印は福島正則丁場でしか確認できていないため、前島石丁場跡では福島正則が採石していた可能性があります。

④沖島（東幡豆町）

2種の刻印が報告されていますが、本年度行った調査では確認できていません。昨年度の調査で、残石は主に島の北東から東にかけて分布していることがわかっています。

表1 三河湾沿岸部の主な矢穴石分布地

場所	矢穴石の残石数	刻印石数	確認された刻印
1 吉良正法寺北側	1	1	⊙
2 吉良宮崎海岸	護岸工事で消失		
3 幡豆八貫山	10	9	⊗ △ ⊕ ⊙
4 幡豆田尻海岸	4		
5 幡豆崎山海岸	2	1	⊙
6 吉良靴島	7		
7 幡豆寺部海岸	21	2	⊙ ⊕
8 幡豆紺屋谷戸周辺	29	1	⊙
9 幡豆西丸山海岸	8		
10 幡豆洲崎～中の浜海岸	5		
11 幡豆愛知こどもの国	3		
12 幡豆沖島	29	2	△ □
13 幡豆前島	78以上	4	△ ⊕ ⊕ ⊗
蒲郡西浦田土社周辺	3	1	⊗ ⊙
蒲郡西浦海岸	10		△ ⊕ ⊕ ⊗ ⊕ ⊕ ⊕
蒲郡竹島	30以上		⊗ ⊙



正法寺古墳北側の矢穴石(平成31年1月撮影)

出典：『新編西尾市史 資料編1 考古』

前島の残石



八貫山の残石



2. 安泰寺の「石割奉行の位牌」

安泰寺は西尾市西幡豆町にある曹洞宗の寺院です。矢穴石が多数確認されている寺部海岸の北側に位置しています。欠城主小笠原摂津守長重により幡豆小笠原氏の菩提寺として、永正10（1513）年に創建されたと伝わります。

平成22（2010）年に『幡豆町史』を編さんするにあたり、安泰寺にある位牌が調査されました。その結果、名古屋城を築城する際の採石に関与した人物の位牌であることが判明しています。

令和6年度の前島石丁場跡の調査の際に、再調査を実施したところ、位牌の台座の裏面に墨書きがあるのを発見しました。

（1）『幡豆町史』編さんの際の調査

平成22年の調査では、江海院殿雄山宗英居士なる人物の位牌で、表・裏面の線刻は先の尖ったもので後年に追刻されたものだということが判明しています。『檀那牒』（安泰寺所蔵）や『過去簿』

（安泰寺所蔵）に位牌と同一の人物の記載が確認されており、亡くなった人物が「長門国の淡屋次郎衛門」で、長門国（現在の山口県）に居住していたことがわかっています。また、「石割奉行」という文言が確認できますが、石割奉行という役職は文献史料には見当たらない名称です。

【塔身裏面】



〔西山極〕

慶長十五稔庚戌五月三日

〔石割奉行尾城立時逝〕

【塔身表面】

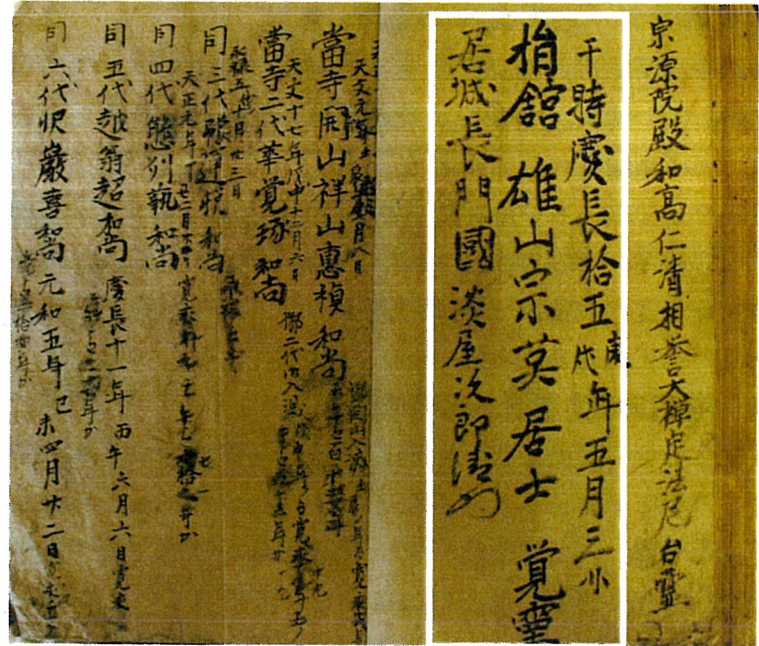


江海院殿雄山宗英居士
神儀

【塔身全体】

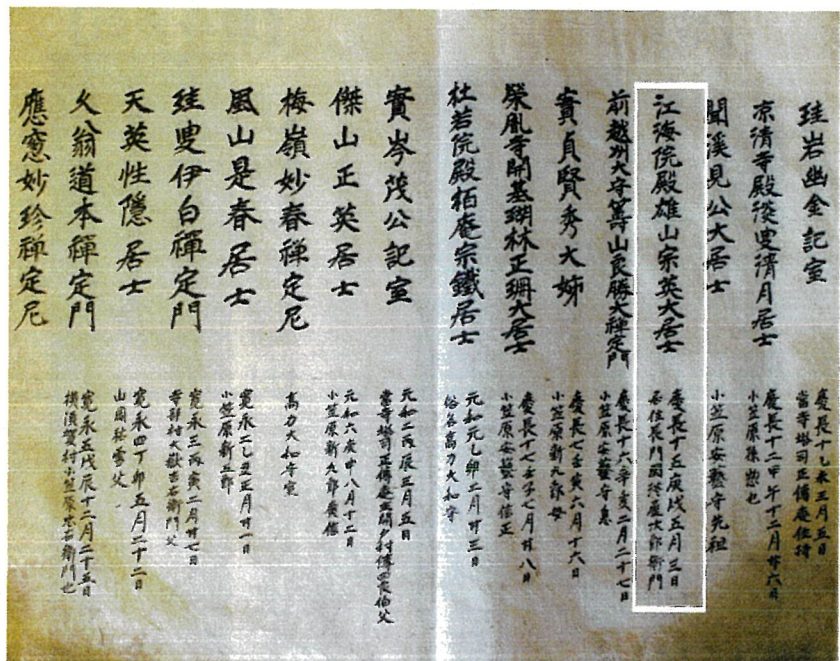


干時慶長拾五庚戌年五月三日
 捐館 雄山宗英居士 覺靈
 居城長門國淡屋次郎衛門



『檀那牒』（安泰寺所蔵）

江海院殿雄山宗英大居士
 慶長十五庚戌五月三日
 居住長門國淡屋次郎衛門



『過去簿』（安泰寺所蔵）

(2) 令和6（2024）年の再調査

前島石丁場跡の調査の際に再調査を実施したところ、位牌の台座の裏面に墨で文字が書かれているのが判明しました。位牌の塔身の文字や後年に線刻されたものとは書きぶりとは異なるものであり、いつ頃書かれたものかは不明です。墨書きの内容について、注目すべき点が2点あります。

1点目は、「石取之奉行」という文言です。『幡豆町史』編さんの際の調査では位牌の塔身表側に「石割奉行」という追刻された文言が確認されていますが、台座の裏側とは呼称に違いが見られます。これらは史料上には見られない文言ですが、毛利家に関する史料を見ていくと毛利輝元や秀就

から毛利家重臣に対して、石丁場や名古屋城普請に関する手紙が出されています。つまり、重臣がまとめ役を担っており、その下の「石割奉行」「石取之奉行」が指示を受けて石丁場で石材の採石を行っていた可能性があります。

2点目は、「西山」という文言です。位牌の塔身裏面にも、「西山」という文言が確認できます。これについては、「西山という場所に葬った」または「西山という人物が葬った」と解釈できます。

前者の地名であるとする、安泰寺から見て西側の山を意味し、そこに塚があると解釈ができますが、現状塚は見つかっておりません。また、現在の東幡豆町に「西山」という地名があります。この地名が当時存在していたのか定かではありませんが、西山付近（紺屋谷戸周辺）では残石も確認されており、石丁場があったと推定されます。そのため西山付近で採石中に亡くなり、そこに葬って塚を建てたということも考えられます。ただし、『幡豆町史』沖島で採石中に亡くなったと推定しています。

後者の人名の可能性については、『安泰寺文書』を確認しましたが西山という人物を確認することはできませんでした。しかし、位牌の塔身の裏側に線刻で「西山極」と書かれています。「極め」は判定するという意味があるため、西山という人物が位牌を調べて、名古屋城の築城に関わった人物であったことがわかったため、位牌に記した可能性が考えられます。

【位牌台座裏側の墨書】

尾城初建年
石取之奉行
来逝西山



(3) 石割奉行 淡屋次郎衛門について

淡屋次郎衛門については、毛利家に関する史料2点から確認できます。

1点目は、『近世防長諸家系図綜覧』です。その中に所収されている「一門三丘宍戸家」によると、苗字は粟屋、名は孝春（五郎左衛門、次郎左衛門）で、慶長15年5月4日に尾州名古屋城の御手伝普請奉行として出張中に亡くなったとあります。粟屋次郎衛門孝春の名が宍戸家の家系に出てくるのは、孝春が宍戸元秀の三男として生まれたからであり、孝春は粟屋孝重が病身で家が断絶しかけたとき、旧縁から粟屋孝重の娘と結婚し、粟屋家に婿入りしています。また、『閩閩録』巻九十一の「粟屋吉兵衛」の項にも、「粟屋次郎右衛門尉孝春と申者、宍戸左衛門尉元秀三男二而御座候、次郎右衛門尉嗣子無御座付而」と書かれており、『近世防長諸家系図綜覧』の内容と一致します。

しかし、逝去した年齢に若干の差異が見られる。『近世防長諸家系図綜覧』には、「四十二歳」で逝去したと記されているが、『閔閔録』には「三十八歳」で逝去したと記されています。誤写なのか定かではありませんが、いずれが正しいのか不明であります。また、これら史料と位牌や『檀那牒』と比較すると、淡屋次郎衛門の名前や逝去日、法名など様々な相違が見られるが、大筋同じであるため、同一人物とみている。

まとめ

近年の分布調査の成果により、市内石丁場の実態が少しずつ明らかになってきています。石材の供給地の調査・研究を進めていくことで、消費地（名古屋城・吉田城・西尾城）との繋がりを明らかにしていきたいです。

また、安泰寺の位牌に関しては、台座の裏側から新たに「石取之奉行」「西山」という文言を確認することができました。「石割奉行」がどのような職種であったのか、「西山」については地名や人名であるのか不明であるため、今後の検討課題としていきます。安泰寺にある位牌や『過去牒』は毛利家が幡豆地区の石丁場にいたこと示すものであり、安泰寺は毛利家の拠点であったのではないかと考えています。

参考文献

- ・井口喜景「安泰寺「石割奉行の位牌」について」『名古屋城調査研究センター研究紀要』第6号 2025
- ・加藤安信「名古屋城の築城と幡豆地域」『幡豆町史 本文編2 近世』西尾市史編さん委員会 2016
- ・加藤安信「矢穴石」『新編西尾市史 資料編1 考古』新編西尾市史編さん委員会 2019

蒲郡市の残石

蒲郡市博物館 松田 繁

1. 蒲郡市と採石の歴史

蒲郡市では古くから石材産業が盛んであった。特に合併前の西浦町では、漁業とならんで主要産業として石材業があり、「幡豆石」と呼ばれる花崗岩を採掘していた。堅牢な幡豆石は港湾や河川工事の築堤や捨石の需要が高く、昭和50年ころに実質的な採掘が終了するまで、伊勢湾、三河湾沿岸の港湾建設、災害後の海岸施設復旧などで多く使われた。

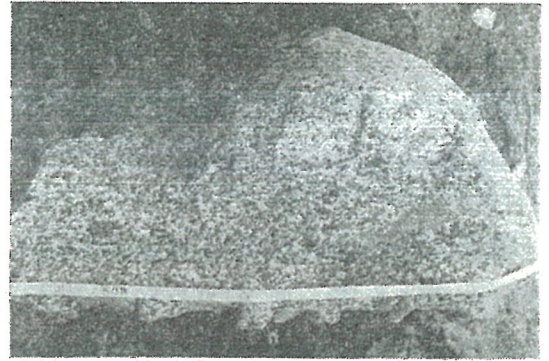


第1図 蒲郡の残石分布図 (名称は松下2006を参考に加筆)

2. これまでの調査

蒲郡市で江戸時代の石材採掘について触れたものとしては、昭和49年(1974)発行の『蒲郡市誌』がある。西浦半島南端東側の長瀬採石場で見つかった矢穴のある石について、「岩石に「のみ」で2寸(6センチ)間隔くらいで穴を数カ所あけ、それにカシの木などで作った矢(くさび)を打ち込んで石を割っていた。明治12~13年ころから火薬使用が始まり…」と、写真を付けて記載している(写真1)。石材の刻印について記されたものとしては、

蒲郡市文化財愛護推進委員会の埋蔵文化財班による「昭和56年度埋蔵文化財調査報告」がある。内部資料なので公開されているものではないが、昭和56年11月18日の分布調査報告で「田土山田土社近辺の大岩の調査。市内各所に点在する巨石信仰の一つと思われるが、岩に刻まれた(○に三つ星)のマークやたがねあとは再考の余地あり」と書かれており、この時に田土山の刻印(第2図18)と矢穴を確認していることが分かる。



写5-16. 矢割法による石
約6cm間隔で「のみ」のあとがみられる
長瀬採石場(昭和46年8月)

その後の蒲郡市の残石については、名古屋市の高田祐吉氏の研究によるところが大きい。高田氏は、名古屋城の石垣に刻まれた刻印との関連から、蒲郡市竹島、西浦半島の海岸部にある刻印、矢穴について紹介した【高田1999】。また、名古屋城普請の命令が発せられた慶長15年(1610)閏2月8日と、根石置きが始まる6月3日、加藤清正が天守台を竣工した8月27日の日付から、石材調達、運搬時期を現在の3月から6月頃と推定、現在の気象条件に当てて石材の航路について検討を行った【高田2003】。その後、高田氏と、高田氏の調査に協力した地元西浦町の壁谷善吉氏によって、西浦半島の海岸部や山間部で多くの刻印が発見、報告されてきた【松下2006・高田2006(第2図)】。現在、蒲郡市内で刻印、矢穴が認められる場所については、高田氏が10地点を挙げている【高田2009】

写真1 西浦半島の残石(『蒲郡市誌』より)

ほか、2012年には西浦半島海岸部で「三左」の刻印も新たに見つかった。今年に入って、名古屋城調査研究センター、豊橋市文化財センター、西尾市教育委員会などと共同で行った残石調査で、西浦町の田土山山中、また市内五井町の医王神(いぼがみ)古墳で新たな刻印も見つかっており、今後も調査を継続していく予定である。

今年に入って、名古屋城調査研究センター、豊橋市文化財センター、西尾市教育委員会などと共同で行った残石調査で、西浦町の田土山山中、また市内五井町の医王神(いぼがみ)古墳で新たな刻印も見つかっており、今後も調査を継続していく予定である。

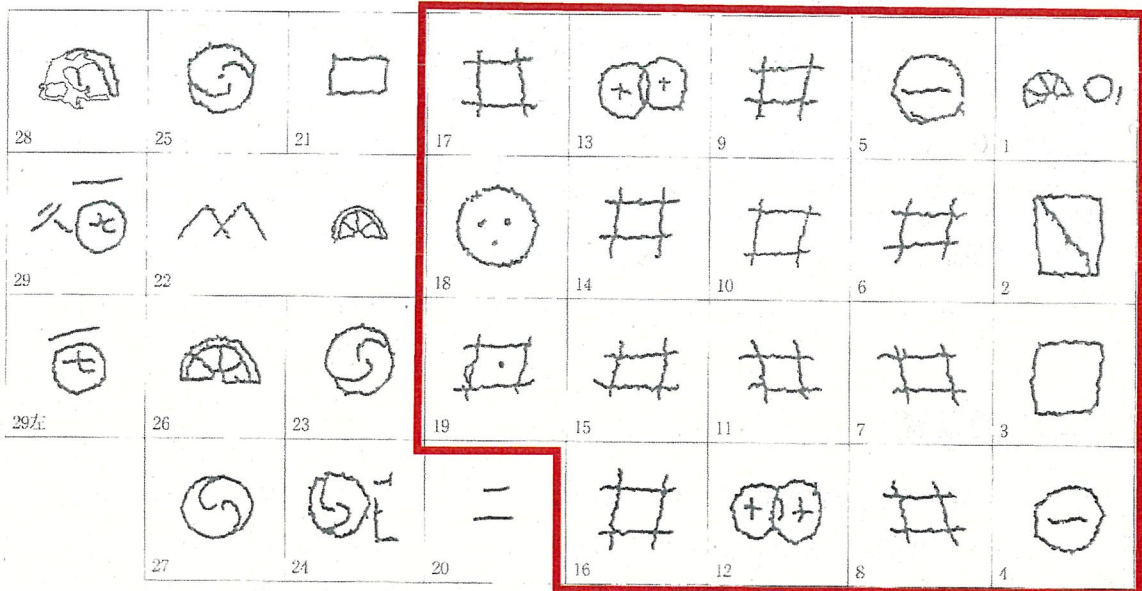


図3 三河湾刻印

- | | | | | | |
|------|------------------------|-------|-------|------------------------------|-----------|
| 1 | 蒲郡市竹島町竹島 北西の灯明台東南に隣接 | 毛利秀就 | 18・19 | 蒲郡市西浦町田土山 田土社付近 | 池田輝政 |
| 2 | 蒲郡市西浦町宮地11 八王子神社社務所沓脱石 | 池田輝政 | 20・21 | 幡豆郡幡豆町東幡豆沖島 東海岸 | 毛利秀就 |
| 3 | 蒲郡市西浦町折敷田(私有地) | 福島正則 | 22~28 | 幡豆郡幡豆町鳥羽崎山 八貫山頂上付近 | 加藤清正 |
| 4・5 | 蒲郡市西浦町大山橋出鼻灯台南 波打ち際 | 福島他七名 | 29 | 幡豆郡吉良町乙川西大山25 正法寺古墳の墳丘北端 道路際 | 毛利秀就の可能性大 |
| 6~17 | 蒲郡市西浦町大山 波打ち際(駐車場西) | 福島正則 | | | |

第2図 蒲郡市域の残石刻印【太枠内】(高田2006から引用)

3. 蒲郡市内の残石

(1) 竹島 (第3図)

竹島の残石は、島の東岸中央部、西岸の北部・中央部・南部の4つのまとまりが見られる。今年の調査で残石は29石(うち刻印は3石)を確認している。竹島は花崗岩帯の中に黒色の角閃岩岩脈が横断しており、東岸中央部と西岸中央部はこの岩脈に当たる。西岸北部の灯籠のある岩盤には、24本の矢穴列、175の矢穴【高田1999】があり、その南にある角閃岩には「一文字と星と生駒車」の刻印と矢穴がある。また、西岸中央部には「九曜」「九曜＋一文字」の刻印(角閃岩)があり、西岸南部には遊歩道の基礎に使われた残石もある。

(2) 西浦半島山間部 (第4・5図)

西浦半島山間部は田土山、稻生山、原山に分かれる。

田土山は、山頂付近に田土社(伝承では元和元年創建、昭和56年に火災で全焼し八王子神社へ合祀)があり、その社殿裏の大岩に矢穴が無数に打たれている。先述の○に三つ星(現在は埋没といわれる)のほか、井桁に星、今年の調査では井桁の刻印が見つかった。

原山では、山頂へ向かう登山道沿いに比較的小さな残石が数個散乱し、山頂から西に下る斜面で矢穴が打たれた大型の残石を2か所確認している。稻生山にも矢穴の残石がある。

(3) 西浦半島海岸部 (第6図)

西浦半島海岸部は、西側から大きく折敷田(おりしきだ)、大山海岸、橋田、御前崎(ごぜんぎき)・稲村神社に分かれる。

折敷田(私有地のため立入は禁止)は、上面、側面に無数の矢穴が打たれている大型残石が見られる。また、高田氏の報告では「□」の刻印のある残石もある。

大山海岸では矢穴を伴う残石が、橋田では矢穴とともに「井桁」「丸に十字」「丸に一文字」「三左」など刻印は13石が報告されている。

御前崎では、すぐ北側の山頂にある稲村神社付近と山の斜面で岩盤が露出し、その露頭で矢穴が確認されている。また、急傾斜で落ち込んだ先にある海岸では、「一文字＋鱗」など4石の刻印があると報告されている【高田2009】。

(4) 医王神古墳

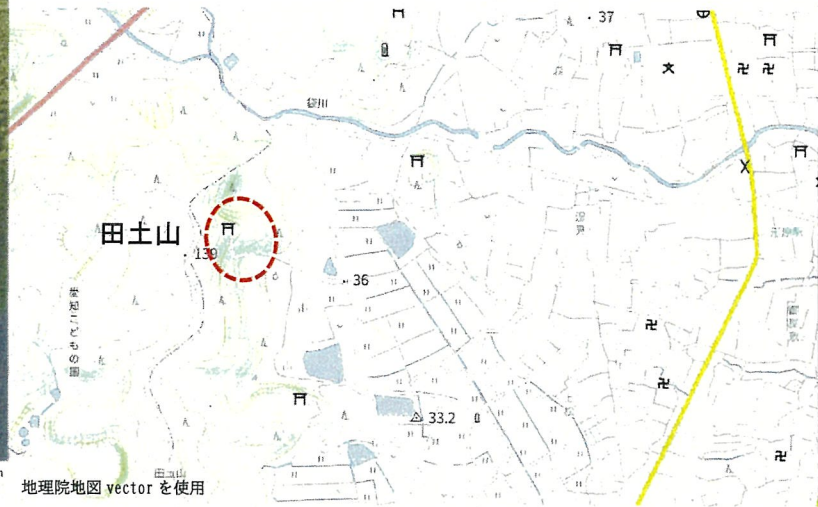
医王神古墳は、蒲郡市五井町内に所在する、古墳時代後期の横穴式石室を伴う円墳である。石室のうち、大きな天井石2石に、縦横に矢穴が穿たれており、1石は割られているにもかかわらず持ち運ばれていない(写真2)。また、今年の調査でもう1石には刻印があることも分かった(紋様の内容については要検討)。



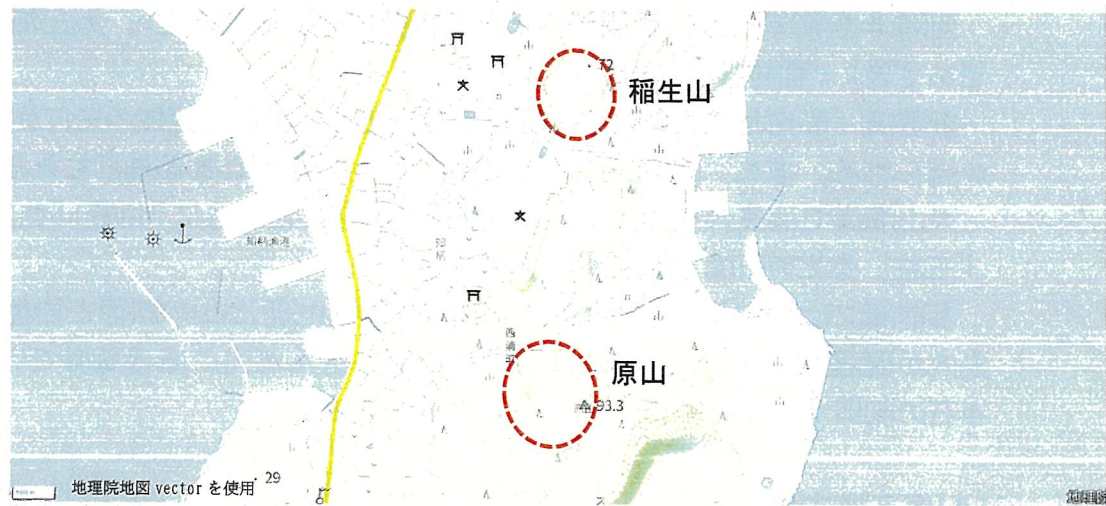
写真2 医王神古墳の割られた天井石と矢穴



第3図 竹島の残石分布図



第4図 山間部（田土山）の残石範囲



第5図 山間部（稲生山・原山）の残石範囲



第6図 海岸部（折敷田・大山海岸・橋田・御前崎・稲村神社）の残石範囲

(5)その他

蒲郡市内では、元々あった場所からは動かされているが、矢穴や刻印がみられる残石がいくつか確認されている。

- ・八王子神社社務所（西浦町）…矢穴・刻印「☐」（第2図2）
- ・西浦小学校校訓碑の台座…矢穴
- ・天桂院境内（竹谷松平家菩提寺・蒲郡町）…矢穴

4. 江戸時代初期の蒲郡市域の支配体制

名古屋城築城時の慶長15年（1610）、また、吉田城本丸御殿完成時の元和8年（1622）における、蒲郡市域の残石が確認された場所の領主は以下の通りである。

〔慶長15年（1610）〕

西浦半島周辺…旗本・形原松平家（家信・5,000石）
竹島・五井村…大名・深溝松平家（忠利・10,000石）

〔元和8年（1622）〕

西浦半島周辺…旗本・長沢松平家（清直・5,000石）
竹島・五井村…旗本・竹谷松平家（清昌・5,000石）

これら領主が、この時期どの様に名古屋城、また吉田城に関わっていたかについては、史料がないためよく分からない。ただ、竹島・五井村を領有した竹谷松平家に伝わる『松平家文書』には、石材に関して次のような史料がある【蒲郡市1974】。

土井利勝書状（土井利勝↓松平清昌）

進上
しんじょう

平石式拾五
ひらいしにじゅうご

面式尺七寸々壹尺五寸まで
めんしにしゃくなすんよりいつしゃくごすん

長四尺式寸々式尺九寸迄
ながきよんしゃくにしんよりにしゃくきゅうすんまで

右江戸にて差し上げ申し候、
みぎえど さあ もう そうろう

五月十一日
まつだいらげんぼのかみ
松平玄蕃頭

右の通り披露を遂げ候、以上、
みぎ とお ひろう と そうろう いじょう

土井大炊頭（花押）
どいおおいのかみ

元和6年(1620)5月、竹谷松平玄蕃頭清昌が江戸城普請のため平石25個を進上し、江戸で將軍徳川秀忠に披露された。このことに対して、清昌宛に秀忠から御内書、老中土井大炊頭利勝から礼状(御内書の添え状)が送られている【蒲郡市1974・愛知県2015】。

書状によると、献上された石材の大きさは、面が45~81cm、長さは88~127cmほど。石垣の築石に適したサイズとなっている。この石が、領内に残る名古屋城普請後の残石なのか、新たに切り出された石だったのかは別に考える必要があるものの、これら史料によると、吉田城本丸御殿が完成する元和8年の2年前に、竹谷松平家領内から江戸城普請のために石材を江戸へ運ぶ、ということが行われていたようである。

5. おわりに

良質な石材を豊富に切り出せる三河湾沿岸の石丁場は、海に面し運搬にも適していたことから、石垣普請を担当した(させられた)大名たちには非常に重宝されたのではないかと。各石丁場の残石や、陸地、海中を含む地形などを詳しく調べることで、関与した大名や石丁場ごとの石材の切出し方に相違があるのか、搬出時の積み込み経路(石引道)や運搬方法なども解明されていくのではないかとと思われる。また、今後の新たな残石の発見にも期待したい。

引用・参考文献

- 蒲郡市『蒲郡市誌』蒲郡市誌編纂委員会 1974
- 高田祐吉『名古屋城石垣の刻紋』続・名古屋城叢書2 1999
- 高田祐吉「名古屋城の採石地と残石」『石垣普請の風景を読むー城の石垣はいかにして築かれたかー』シンポジウム資料 東北芸術工科大学芸術学部歴史遺産学科編 2003
- 松下悦男「名古屋城の築城と石の切り出し」『蒲郡市史』本文編2近世編 蒲郡市史編纂事業実行委員会 2006
- 松下悦男「第二節 西郡の領主」『蒲郡市史』本文編2近世編 蒲郡市史編纂事業実行委員会 2006
- 高田祐吉「石垣刻印が語るもの」『東海道の城下町展Ⅱ』豊橋市二川本陣資料館 2006
- 高田祐吉「名古屋城と石切丁場ー刻印調査を通してー」『別冊ヒストリア 大坂城再築と東六甲の石切丁場』大阪歴史学会 2009
- 高田祐吉・加藤安信「名古屋城の丁場割と石垣の刻印」『新修名古屋市史』資料編考古2 名古屋市 2013
- 愛知県『愛知県史』資料編2 2領主2近世8 愛知県史編さん委員会 2015
- 加藤安信「矢穴石」『新編西尾市史』資料編1 考古 西尾市史編さん委員会 2016

名古屋城の石垣と三河湾

大村 陸（名古屋市名古屋城調査研究センター学芸員）

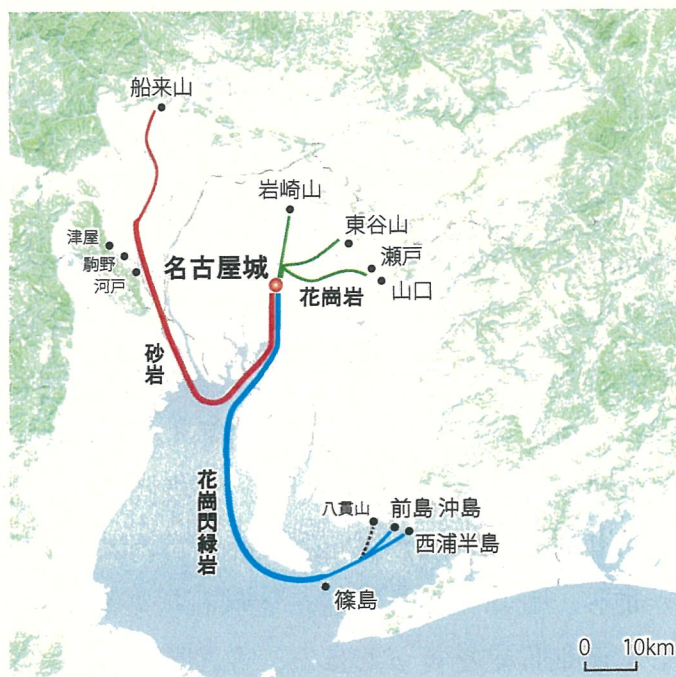
（1）名古屋城石垣の概要

名古屋城は慶長15年（1610）に徳川家康の命により公儀普請で築城が開始されました。築城には西国・北国の大名を中心に20家が動員され、総延長約8.2kmの長大な石垣が築かれました。名古屋城築城時の史料から、慶長15年（1610）2月に普請が開始され、6月から石垣工事に着手、8月末には天守台石垣が完成、9月には他の部分もほぼ完成していたことがわかっています。また、築城時に各大名へ割り当てられた石垣担当箇所を示す「丁場割図」も残されており、名古屋城の石垣がそれぞれの大名によって築かれたのかを知ることができます。名古屋城は江戸時代を通して尾張徳川家の居城となり、明治時代以降は陸軍省、宮内省、名古屋市と所有者を変えながら今まで守られてきました。石垣は崩落などの度に各所有者によって積み直しされてきましたが、今でも慶長期の石垣が広範囲で残されています。

（2）名古屋城石垣石丁場跡について

濃尾平野南部に位置する名古屋城は、近郊に石垣用材を採石できる岩山がありません。このため、少し離れた濃尾平野周縁部や三河湾を中心に、各地から採石された大量の石材が名古屋城に集められました（第1図）。濃尾平野ではこれ以前に長大な石垣を用いた城郭が存在しないため、名古屋城築城に際して数多くの石丁場が開発されたと考えられます。また、名古屋城の石垣に用いられている石材は、主に花崗閃緑岩・花崗岩・砂岩の3種類で、それぞれ採石地域が異なります。この採石地域内に石丁場跡が点々と残されており、石丁場跡では採石のなかで矢穴・刻印がつけられた岩盤や残石、石材の搬出路である石曳道などの痕跡をみることができます。石丁場跡は石垣石材の生産遺跡として、名古屋城築城の実態を知るためには欠かすことのできない重要な遺跡といえます。

石丁場は当時の史料にも度々登場します（後藤2022、堀内2025）。細川家史料は書状が多く残されており、採石作業の実態を窺うことができます。閏2月10日の細川忠興書状に「我々者濃州つやと申石場ニ有之候而、石を出させ申候事」とあり、美濃国津屋の石丁場で指揮をとっていましたが、閏2月19日にはこの地に良い割石がないとして尾張国「瀬戸」「山口」で石を取るように命じています。また、3月27日には「かうづより来候石、中々やくニ立



第1図 主な名古屋城石垣石丁場跡と石材搬入

申事ハまれにて候」と美濃国河戸から来た石が役に立たないだろうと記し、苦しい石材調達の様子がよく見取れます。この他、細川家史料には美濃国「駒野」石丁場の記載があります。一方、三河湾の石丁場や地名は現在残る史料には登場せず、記録としては西尾市安泰寺に安置されている毛利家家臣の「石割奉行」位牌のみです。名古屋城築城に伴う採石はこの地域だけに留まらず、各大名の領地でも行われました。それを示すのが山内家史料にみられ、4月27日に土佐国「小間目」（古満目）で石を積み、船を名古屋へ出発させていることが記されています。このように当時の史料には採石作業の様子が断片的に登場しますが、名古屋城の公儀普請に参加していなかった島津家久が諸大名から名古屋城での石材調達について伝え聞き、こう記しています。「日本之普請ハしまり候てより、かやうなる普請ハ有之ましきよし、其沙汰候」、つまり日本で城郭の普請が始まって以来、名古屋城ほど石材調達が難しい普請は無かったと評されていたのです。

現存する慶長期の大名家文書には限りがあるため、他大名家の石丁場や詳細な採石体制、当時の土地支配と石丁場開発の関係など多くの実態が不明なままとなっています。名古屋城築城以降の石丁場跡の使用については、岩崎山石丁場跡と船来山石丁場跡が尾張藩の石丁場として管理されたほか、近年では吉田城の石垣用材などへの転用が確認されています。また、一部の石丁場跡は江戸時代後期や明治時代以降にも採石された痕跡がみられ、西尾市幡豆地域では今でも花崗閃緑岩の採石場が操業しています（直接的な関係は不明）。こうした後世の転用も多くありますが、当時の姿が良く残されている石丁場跡もあり、古くから調査研究が進められてきました。

（3）名古屋城石垣石丁場跡の先行研究

名古屋城の石丁場跡について最も古く言及しているのは城戸久氏で、名古屋城の通説を再検討するなかで、文献史料などから採石地が美濃・三河・尾張・伊勢（篠島）・紀伊・摂津・播磨・讃岐・肥前に分布するとししました（城戸1943、1959）。このうち、摂津・播磨・肥前は根拠が乏しいですが、典拠としている史料やその解釈は今も大きく変わってはおらず、城戸氏の研究が基盤となって研究が進んできたといえます。一方、現地調査による研究としては、高田祐吉氏による刻印・残石の研究があります。名古屋城石垣の刻印に着目して悉皆調査したほか、各地に残る残石も調査して名古屋城普請の全容把握に大きく貢献しました（高田1989、1999、高田・加藤2013）。

各市町村でも自治体史編さんをきっかけに石丁場跡の調査が行われてきました。三河湾沿岸では蒲郡市域、西尾市幡豆地域、南知多町篠島で分布図や刻印などが報告されています（松下2006、加藤2008、石橋2014、加藤2019）。こうした調査研究に対して、名古屋城では石垣修理工事を行ってきっており、塩蔵門跡石垣修理工事以降は解体石材全点の産地が報告されています（名古屋市1989など）。ただし、先行研究とは対応しておらず、調査内容も不明なまま参考できない多種多様な石材産地が報告されていました。変換点となったのは2002年から着手した本丸搦手馬出石垣修理工事で、岩石学の視点から石質調査が行われました（名古屋市2006）。ここから岩石学による調査研究が進み、田口一男氏は名古屋城石垣の花崗斑岩に着目して、採石地の石材と同様に蛍光X線分析をして産地推定を行ったほか、名古屋市守山区東谷山及び瀬戸市山口で新たに確認した石丁場の報告などを行っています（田口・鈴木2015、田口・佐藤2015、田口・佐藤・中野2019）。また、前章で

取り上げた文献史料の研究も進んでおり、近年は様々な分野からのアプローチによって新たな実態解明に繋がっています。

先行研究のうち、石丁場跡の現地調査では、多くが地形図に残石の位置を落として分布図を作成し、刻印のトレース図や写真とともに報告されてきました。しかし、特徴的な構造物及び地形がない山中や島嶼の分布図では、調査時にも正確な位置を落としているか疑問が残り、報告をもとに残石を再確認することが難しいデータとなっていました。近年では、計測技術の発展によって比較的簡易にUAV撮影や座標計測、3D計測が可能となり、これらを活用することでより正確な調査データを記録・提示することができます。こうした背景から、発表者らは2023年に長久手市猪鼻堰残石群の調査を行い（大村・川出ほか2024）、多角的かつ最新技術による調査の有効性を確認しました。これに続き、2024年に実施したのが西尾市前島石丁場跡の調査です（大村・浅岡ほか2025）。

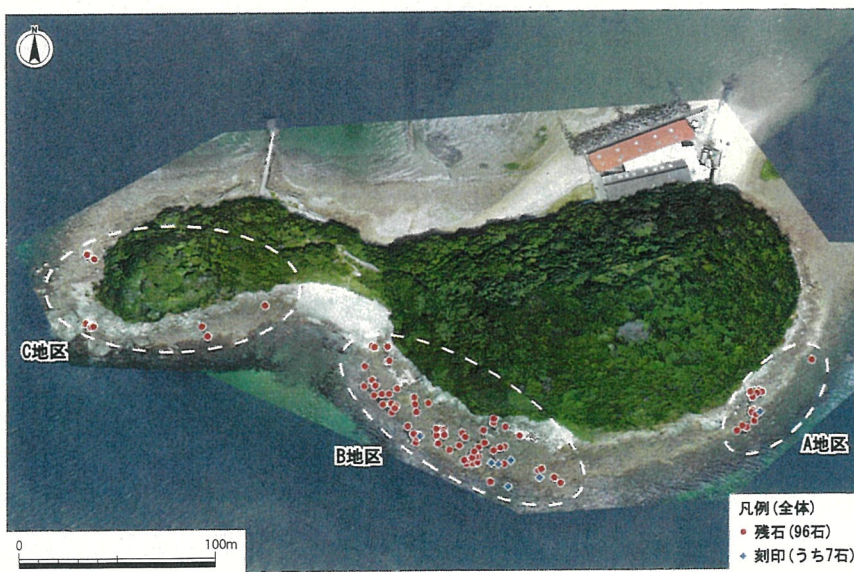
（4）三河湾石丁場群の調査—西尾市前島石丁場跡—

西尾市前島石丁場跡は、三河湾に浮かぶ前島に残る石丁場跡です（第2図）。前島は東幡豆海岸から約0.5kmの沖合にある無人島で、かつてはうさぎが放し飼いにされうさぎ島とも呼ばれていました。干潮時には砂州が現れ、トンボロ現象によって歩いて渡ることができます。前島石丁場跡は『幡豆町史』にて平成19年（2007）に一度調査されており、78個以上の残石があることが報告されています。分布図は概略図にプロットした図面であり、現地での再確認ができず、全容を把握できていなかったため、改めて調査しました。

調査は大きく分けて6つの視点から行いました。①測量調査は、UAV撮影とその画像を用いたフォトグラメトリによって前島全体の3Dモデルを作成し、座標計測（RTK-GNSS）の成果から位置情報をもったオルソ画像を生成しました。②分布調査では、前島の海岸にある石材を1点ずつ矢穴や刻印がないか確認し、残石として認定できた石材を対象に、写真撮影と座標計測を行って分布図を作成しました。分布調査によって、既報より多く残石を発見し、96個の残石があることを確認しました。オルソ画像に残石の位置をプロットした分布図を作成し、1点ごとの座標値も合わせて報告することで再確認しやすい調査データを提示しました（第3図）。③石質調査は、分布調査で確認

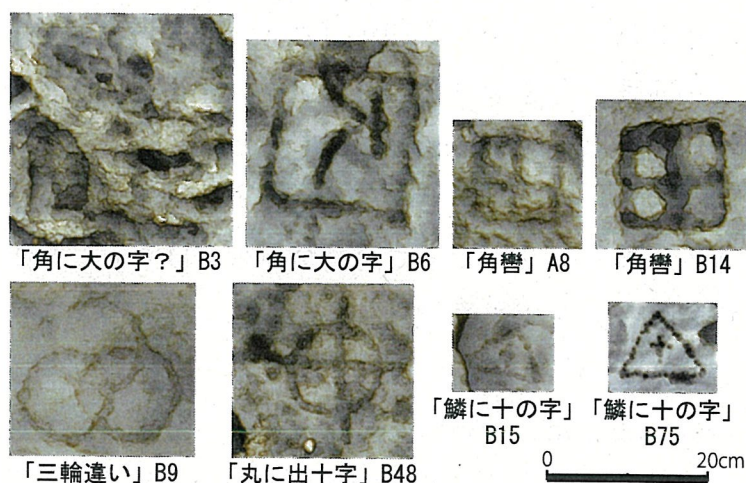


第2図 前島石丁場跡全景（南から）



第3図 前島石丁場跡 残石・刻印分布図

した96個の残石を対象に、1点ずつ肉眼観察で岩石学的な特徴を調査しました。その結果、同じ前島内でも主に3種類の岩石を確認し、暗色包有物をもつ黒雲母角閃石花崗閃緑岩、アプライト様花崗岩、暗色包有物をもたない黒雲母角閃石花崗閃緑岩とアプライト様花崗岩との混在岩などの火成岩が認められました。また、島北側では縞状片麻岩がみられ、この石材を採石した痕跡は確認できなかったことから、石材を選んで採石していたと考えられます。④矢穴調査では、96個の残石を対象に、矢穴の形状を計測し、特徴的な矢穴についてはフォトグラメトリによって3D計測で記録しました。矢穴の計測結果は、矢穴口長辺の大半は5～15cmに分布し、その半数が9～11cmに集中しました。また、深さは5～13cmに分布のうち5～8cmに半数が集まり、矢穴の大きさとしては多数を占めるやや大型のタイプと少数の小型のタイプ2種類が確認できました。このため、前島石丁場跡での採石に最も使用されたのはやや大型の矢穴であったと考えられます。⑤刻印調査では、分布調査の際に発見した5種8点の刻印を対象に調査しました（うち1点は報告後に発見）。刻印の内訳は、「角に大の字」「角轡」「鱗に十の字」が各2点、「三輪違い」「丸に出十字」が各1点でした。各刻印をフォトグラメトリによって3D計測し、表面の凹凸を可視化処理することで、より刻印の様子が判別できるようなデータを提示しました。なお、既報の『幡豆町史』ではこれらの刻印に加えて「立鼓」の刻印が報告されており、当時の位置図などからも調査しましたが、改めて確認することはできませんでした。⑥文献調査は、西幡豆町安泰寺の「石割奉行」位牌を再調査しました。『幡豆町史』で調査されていましたが、改めて位牌を確認したところ、台座部分にも墨書が残されていることを新たに発見しました。以上が前島石丁場跡を再調査した結果ですが、石丁場跡を評価するにあたっては名古屋城との比較検討が重要となります。



第4図 前島石丁場跡刻印一覧(3D可視化)

(5) 名古屋城の石垣と前島石丁場跡の対応

名古屋城石垣とその生産地である石丁場跡を比較検討するにあたり、検討材料となるのは石質・矢穴・刻印です。この要素について順に見ていきます。石質調査では3種類の岩石を確認しましたが、このうち粗粒花崗閃緑岩は名古屋城石垣でも多く確認することができます。混在岩も暗色包有物をもつ花崗閃緑岩は多くあり、この2種類は名古屋城石垣でも一般的な岩石といえます。残るアプライト様花崗岩は名古屋城石垣でほとんど見ることができず、前島石丁場跡で特徴的な岩石と考えています。矢穴調査では2種類の矢穴を確認しましたが、名古屋城石垣でも多くの矢穴を見ることができます。また、矢穴の大きさ・形状が時期によって変化することが明らかになっており(二橋2022)、ある程度の時期を推定することもできます。名古屋城の慶長期矢穴と比較すると、矢穴口長辺は8～12cm、深さは4～12cm程度と前島石丁場跡のやや大型の矢穴と類似した大きさを持ちます。また、小型の矢穴は名古屋城の宝暦期矢穴と類似するものもありますが、形状を詳細に比較すると、前島は矢底が平坦で台形状となるのに対し、名古屋城は矢底が明瞭ではなくU字状であ

り、形状までが同一とは言えません。これらのことから、前島石丁場における採石活動の主体は慶長期であったと考えられ、小型矢穴は慶長期以降も採石が行われたことを示す可能性があります。刻印調査では5種8点の刻印を調査し、同種の刻印を名古屋城石垣でも確認しました。名古屋城の石垣は担当大名が判明しているため、刻印から大名を特定できる可能性があります。各刻印の対応として、まず「角に大の字」は数が少なく、本丸不明門枳形北面石垣のほか、西之丸榎多門枳形や御深井丸塩蔵構境（どれも福島正則丁場）で確認しました。「角轡」は城内で多く確認でき、細川忠興丁場、黒田長政丁場、前田利常丁場など様々な大名が用いており、「三輪違い」も多くの箇所でも福島正則丁場や山内忠義丁場などで確認しました。「鱗に点」「丸に出十字」は共通した箇所で確認でき、本丸内堀北部内側石垣や本丸不明門枳形北面石垣など（どれも福島正則丁場）などでみることができました。以上のように各刻印に対応する大名は単独に限られるものと複数の大名が使用するものがあり、一個の刻印から大名を特定するのは難しいといえます。

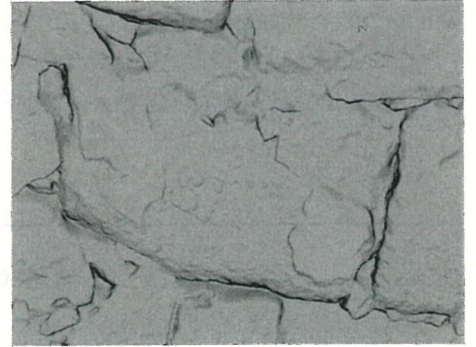
これらの石質・矢穴・刻印の要素は、名古屋城石垣（構築大名）と石丁場（採石大名）を結びつけるものですが、どれも一要素だけでは弱く、三要素が揃えば対応関係が強いと考えています。名古屋城の長大な石垣かつ大量の石材から石丁場跡の残石に対応するものを見つけ出す際、第一に刻印の組み合わせが有効となります。一個の刻印では名古屋城の様々な石垣で同種を見ることができますが、前島石丁場跡で確認できた刻印でも「角に大の字」「三輪違い」「鱗に点」「鱗に十の字」「丸に出十字」を名古屋城で確認できた石垣は本丸不明門枳形北面石垣に限られます（福島正則丁場）。第二に、その石垣の石質を確認すると、砂岩や花崗閃緑岩とともにアプライト様花崗岩がみられ、前島石丁場跡に特徴的な石材がこの石垣にも用いられていることが分かりました。さらにこの石材には「鱗に点」「鱗に十の字」の刻印がつけられていました。第三に、矢穴の大きさ・形状を確認し、石垣に残る矢穴が前島石丁場跡にみられる矢穴と類似していました。ここまでの要素検討をもって、前島石丁場跡で採石していた大名は福島正則で、本丸不明門枳形石垣に使用されているの可能性がある高いという結論に至りました。



第5図 前島石丁場跡 B15 アプライト様花崗岩「鱗に十の字」



第6図 名古屋城不明門枳形アプライト様花崗岩「鱗に点」



第7図 名古屋城不明門枳形「角に大の字」(3D可視化)

(6) まとめ

三河湾に分布する名古屋城石垣石丁場跡について、名古屋城石垣との対応関係を検討した事例として前島石丁場跡での成果を紹介しました。これまでは刻印の研究が進んでいたため、石丁場跡の刻印から名古屋城石垣の担当大名を直接結びつけて考えられてきましたが、必ずしも一対一対応になる訳ではないため、組み合わせや多角的な調査によって検討する必要があると考えています。ま

た、最新技術を用いて正確な調査データを記録・提示することも重要です。こうした調査を積み重ねていくことで、確かに名古屋城石垣に大量に使用されている花崗閃緑岩などが、三河湾からどの大名が石丁場でどのように採石し、石垣を構築したのかという実態解明に繋がっていくと考えています。

引用文献

- 石橋伊鶴「名古屋城と篠島の石垣採石地」『伊勢湾考古』23号 2014
- 大村 陸・川出康博・木村有作・田口一男・二橋慶太郎・高橋圭也・服部英雄「長久手市猪鼻堰跡残石群測量調査報告」『名古屋城調査研究センター研究紀要』第5号 2024
- 大村 陸・浅岡 優・高田祐一・田口一男・二橋慶太郎・井口喜景・小山圭嗣「西尾市前島石丁場跡調査報告」『名古屋 城調査研究センター研究紀要』第6号 2025
- 加藤安信「名古屋城石垣用石切り出し遺跡 八貫山・前島・沖島他の矢穴石」『幡豆町史 資料編1原始・古代・中世』 幡豆町 2008
- 加藤安信「矢穴石」『新編西尾市史 資料編1考古』愛知県西尾市 2019
- 城戸 久『名古屋城』彰国社 1943
- 城戸 久「名古屋城築城の経過と規模」『名古屋城史』名古屋市役所 1959
- 後藤典子「細川忠興・忠利父子の名古屋城石垣普請」『史料が語る 名古屋城石垣普請の現場』名古屋城調査研究センター 2022
- 高田祐吉『特別史跡名古屋城天守台石垣の刻紋』財団法人名古屋城振興協会 1989
- 高田祐吉『名古屋城石垣の刻紋』財団法人名古屋城振興協会 1999
- 高田祐吉・加藤安信「名古屋城の丁場割と石垣の刻印」『新修名古屋市史資料編考古2』名古屋市 2013
- 田口一男・鈴木和博「名古屋城の城郭に使用された石材の産地同定のための全岩化学分析一予報」『名古屋大学 加速器質量分析計業績報告書 (XXVI)』名古屋大学年代測定総合研究センター 2015
- 田口一男・佐藤好司「名古屋城石垣採石丁場の新知見」『名古屋地学』77号 2015
- 田口一男・佐藤好司・中野光孝「石材から見た名古屋城石垣」『椋山女学園大学教育学部紀要』12号 2019
- 名古屋市『特別史跡名古屋城跡 塩蔵門跡 石垣保存修理工事報告書』 1989
- 名古屋市『特別史跡名古屋城跡 本丸搦手馬出跡 石垣修復工事発掘調査報告書 元御春屋門地点の調査』 2006
- 二橋慶太郎「名古屋城石垣における矢穴形状の基礎的検討」『名古屋城調査研究センター研究紀要』第3号 2022
- 堀内亮介「大名家文書からみた名古屋城公儀普請 (1) 一助役大名の動員過程について」『名古屋城調査研究センター 研究紀要』第6号 2025
- 松下悦男「名古屋城の築城と石の切り出し」『蒲郡市史本文編2 近世編』蒲郡市 2006

発表内「(4) 三河湾石丁場群の調査—西尾市前島石丁場跡—」で紹介した調査は、「西尾市前島石丁場跡調査報告」として、2025年に『名古屋城調査研究センター研究紀要』第6号で報告しています。報告は名古屋城公式ウェブサイトでも公開しており、詳細な分布図や各種調査データを掲載しています。合わせてご覧ください。

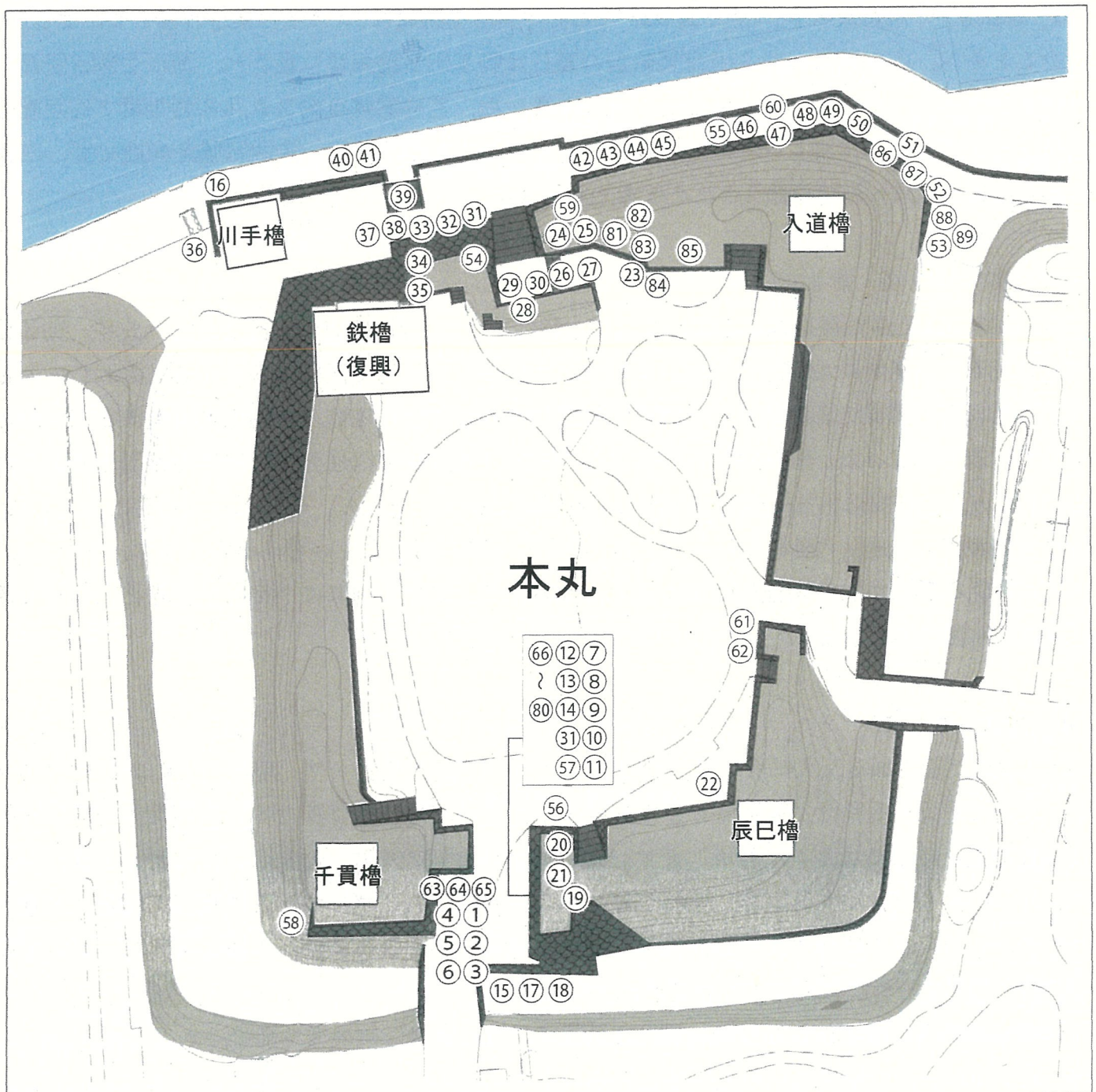


近世吉田城の石垣と三河湾

寺井 崇浩（豊橋市文化財センター学芸員）

（1）吉田城址の概要

豊橋市今橋町の吉田城址は豊川と朝倉川の合流点に位置し、標高約10mの低位段丘（豊橋面）に牧野古白により明応5年（1496）に築られました。天正18年（1590）になると池田照政が入城し、チャート（チャート）を主体とする石垣を主に築きました。その後、元和8年（1622）に吉田藩主松平忠利により本丸御殿が完成しました。これは将軍の御成御殿であり、この整備の一環として、本丸および周辺に花崗閃緑岩を主体とする石垣が築かれたと考えられています。その後、石垣の拡張や宝永・安政地震などによる崩落のため度重なる積み直しを経て、現在に至ります。



第1図 吉田城址刻印位置図（令和7年11月6日時点）

(2) 既往の調査概要

吉田城址における刻印の調査は、高橋延年・柳 史郎氏が40点の刻印を発表したことに始まります(高橋・柳1972)。刻印は幡豆石を中心とした花崗岩に刻まれ、名古屋城でも見られる刻印であることから、名古屋城の残石が利用されたことを指摘しました。その後、高橋延年・後藤清司氏が一部修正を加え、合計57点の現在広く知られる吉田城の刻印一覧表を発表しました(高橋1989)。

令和元～3年にかけて本丸内部で石垣が崩落すると、令和3・4年度に崩落石垣の、令和5～7年度にかけて崩落する危険性の高い石垣の解体修理が実施されました。これに伴う発掘調査(第58・60・63・65・68次調査)では新たに刻印を28点確認しました。さらに、令和5～7年度調査(第63・65・68次調査)では石材に対する矢穴調査を実施しました。

発掘調査では、海洋生物が付着した築石や栗石を確認しました。特に「山田」(第1表74)の「田」の部分や「角に大の字」(第1表83)の石材の割面全面には、ゴカイの巣が付着していました。このことから、吉田城における花崗閃緑岩の築石は切り出し後海岸に置かれ、海洋生物が付着した後に搬入されているものがあることが分かりました。名古屋城は約3か月の短期間で石垣普請を行っています。石材加工からゴカイの巣の付着時間を考慮すると、名古屋城を経由せず、三河湾から直接吉田城へ石材が搬入されたと考えられます。

(3) 刻印(第1図・第1表)

刻印は本丸と北側の腰曲輪の石垣で見られ、現在までに合計89点が確認されています。刻印は確認状況から三種類に大別されます。Ⅰ類は名古屋城と三河湾で同様のものが確認されている刻印。Ⅱ類は名古屋城で確認され、三河湾では確認されていない刻印。Ⅲ類は名古屋城と三河湾の双方で確認されていない刻印です。このうち、Ⅰ・Ⅱ類は従来の通り名古屋城の残石と考えられます。しかし、Ⅲ類は名古屋城・三河湾で現在確認されていません。石材は三河湾産と考えられ、仮に吉田城搬入の過程で刻まれたものであれば、三河湾に残りにくい刻印となります。そのため、吉田城独自の刻印である可能性があります。なお、Ⅱ・Ⅲ類の刻印は今後名古屋城と三河湾で確認される可能性があります。

(4) 矢穴(第2表)

吉田城址で見られる矢穴の多くは大型のAタイプ、小型のCタイプ、現代工法によるDタイプと一般的に呼ばれる形状のものです。令和5～7年度の石垣解体修理に伴う発掘調査で行った矢穴調査成果をここでは用い、紹介します。吉田城では大型の矢穴(Aタイプ)であるⅠ類、小型の矢穴(Cタイプ)であるⅡ類、現代工法による矢穴(Dタイプ)であるⅢ類の3種類に大別されます。さらに、Ⅰ類は矢穴の縦断面形状から5種類に細分されます。Ⅰ類の矢穴は、名古屋城や前島・沖島といった三河湾でも確認されています。

Ⅱ類も縦断面の形状から2種類に細分されます。Ⅱ-A類は前島でも確認されていますが(大村ほか2025)、名古屋城では現在確認されていません。そのため、Ⅱ-A類は吉田城で石垣を築く際に掘られたものである可能性があります。Ⅱ-B類は前島では確認できず、安政地震の積み

第1表 吉田城址刻印一覧

番号	刻印	他所の刻印有無		使用大名 (名古屋城)	備考	番号	刻印	他所の刻印有無		使用大名 (名古屋城)	備考
		三河湾	名古屋城					三河湾	名古屋城		
1			○	池田輝政	「三左」(三左衛門)刻印を大山河岸で確認	45			○	加藤清正など	
2			○		2~4は一石に刻まれる。	46			○		
3			○	山内忠義		47			○		
4			△		高橋延年が名古屋城で確認(高橋・柳1972)	48					名古屋城で未確認
5		前島	○	福島正則		49			○	加藤・福島・黒田など	
6		前島	○	加藤・浅野 など		50			○	加藤清正など	
7			△		高橋延年が名古屋城で確認(高橋・1972)	51			△	福島丁場に類似例	
8			○	山内忠義 (百々綱家?) (百々忠安?)	7~9は一石に刻まれる。	52			○	加藤嘉明	
9			○			53			△	福島丁場に類似例	
10		沖島 折敷田	○	福島正則		54			○		
11		橋田	○			55			○	加藤清正など	
12		前島	○	加藤清正など		56			○	福島・浅野	
13			△	山内忠義	高橋延年が名古屋城で確認(高橋・柳1972)	57			○	山内・加藤嘉 など	
14			○	蜂須賀至鎮		58		御前崎	○	福島・鍋島 ・加藤嘉など	『新編西尾市史資料編1』では「西浦海岸」 となる。
15					名古屋城で未確認	60					名古屋城で未確認
16			○			61			○	加藤・福島・ 黒田など	築石上面に刻印
17			○		名古屋城で似たのが多くみられる	62			○	福島正則	築石上面に刻印
18			○	福島正則		63		前島	○	福島正則	
19			○	黒田など		64					64・65は一石に刻まれる。名古屋城で未確認
20		橋田	○	加藤清正など		65					名古屋城で未確認
21		前島	○	加藤・浅野 など		66		前島	○	福島正則	築石側面に刻印
22			○	加藤清正など		67			○		67~69は一石に刻まれる。築石側面に刻印
23					名古屋城で未確認	68			△	山内忠義	築石側面に刻印 高橋延年が名古屋城で確認(高橋・柳1972)
24					24・25・59は一石に刻まれる。 名古屋城で未確認	69			○		築石側面に刻印
25					名古屋城で未確認	70			○		70~72は一石に刻まれる。築石側面に刻印
59					築石上面に確認。名古屋城にHや丸に上はあ るが同一のものは確認されていない	71			○	山内忠義	築石側面に刻印
26		(竹島)	○	毛利秀就	26・27は一石に刻まれる。 竹島の刻印石は角閃岩	72			△		築石側面に刻印 高橋延年が名古屋城で確認(高橋・柳1972)
27		(八貫山) (竹島)	○	加藤清正	竹島の刻印石は角閃岩、八貫山は珉レイ岩	73		大山河岸 田土社	○	福島・池田 など	築石側面に刻印
28			○	福島正則		74			○	蜂須賀至鎮	築石背面に刻印 「田」にゴカイの巣付着、交換石
29					名古屋城で未確認	75		沖島 (八貫山)	○	毛利秀就	築石側面に刻印、八貫山は珉レイ岩、令和7年 度沖島調査では刻印未確認
30			○	加藤清正など	29・30は一石に刻まれる。	76			△	山内忠義	築石側面に刻印 高橋延年が名古屋城で確認(高橋・柳1972)
31					名古屋城で未確認、ハツリカ?	77			△	山内忠義	築石側面に刻印、高橋延年が名古屋城で確認 (高橋・柳1972)
32		御前崎	○	福島・鍋島 ・加藤嘉など	『新編西尾市史資料編1』では「西浦海岸」 となる。	78		大山河岸 田土社	○	福島・池田 など	築石側面に刻印
33			○	加藤清正など		79		大山河岸 田土社	○	福島・池田 など	築石側面に刻印
34			○	毛利・生駒		80					築石側面に刻印、名古屋城で未確認
35			○	加藤清正など		81			○	加藤清正など	81・82は一石に刻まれる。 築石側面に刻印、石材割れにより交換石
36					名古屋城で未確認	82			○		築石上面に刻印、石材割れにより交換石
37			○	加藤・田中 など	37・38は一石に刻まれる。	83		前島	○	福島正則	築石上面に刻印、同面にゴカイの巣が付着
38			△	福島丁場に 類似例		84		前島	○	福島正則	築石上面に刻印
39			△	福島丁場に 類似例		85					石材割れにより交換石
40			○		40・41は一石に刻まれる。	86			○	加藤・福島・ 黒田など	築石上面に刻印
41			○	加藤清正など		87			○	加藤嘉明	築石上面に刻印
42			○		42~44は一石に刻まれる。	88			○	田中丁場に 類似例	築石上面に刻印
43			△	山内忠義 (百々綱家?) (百々忠安?)	高橋延年が名古屋城で確認(高橋・柳1972)	89			△	山内忠義	築石側面に刻印 高橋延年が名古屋城で確認(高橋・柳1972)
44			○								

※1~57: 昭和54年12月16日 高橋延年・後藤清司調査、58~89: 豊橋市文化財センター調査。
※他所の刻印: 三河湾は高田2006・松下2006・加藤2019、名古屋城は高田・加藤2013を参照。

第2表 吉田城址矢穴分類一覧

分類名	I-A1類	I-A2類	I-B1類	I-B2類
同縮尺				
縦断面	幅広の台形状で、やや丸みを帯びる。大ききや形は列内で不揃いのものが多い。	長方形に近い台形状で、やや角ばる。大ききや形は列内でI類よりも揃う。	幅広な長方形を呈する。大ききや形は列内でほぼ一定。	正方形に近い様相を呈する。大ききや形は列内で不揃い。
横断面	箱型	箱型	箱型	箱型
南多門割合	7%(10列/133列)	40%(54列/133列)	6%(8列/133列)	6%(9列/133列)
北多門割合	17%(13列/74列)	41%(31列/74列)	8%(6列/74列)	8%(6列/74列)
本丸北東隅割合	12%(4列/31列)	25%(8列/31列)	19%(6列/31列)	6%(2列/31列)
寸法	深さ6~8×矢穴底縦幅8~14×矢穴口縦幅9~14cm	深さ7~9×矢穴底縦幅7~10×矢穴口縦幅10~13cm	深さ6~13×矢穴底縦幅7~12×矢穴口縦幅8~13cm	深さ5~10×矢穴底縦幅6~10×矢穴口縦幅9~14cm
深さ：口幅比	1:1.5	1:1.5	1:1.5	1:1
名古屋城(二橋2022)	I-A類	I-A類	I-C類	I-B1類

分類名	I-C類	II-A類	II-B類	III類
同縮尺				
縦断面	縦長の長方形に近い台形を呈する。大ききや形は列内でやや一定。	小型のやや丸みを帯びた台形。大ききや形は列内でほぼ一定。I-A類の小型。	小型のやや丸みを帯びた長方形。	現代工法による矢穴
横断面	箱型	箱型	箱型	棒状
南多門割合	7%(10列/133列)	15%(21列/133列)	0%(0列/133列)	0%(0列/133列)
北多門割合	4%(3列/74列)	1%(1列/74列)	3%(2列/74列)	1%(1列/74列)
本丸北東隅割合	10%(3列/31列)	6%(2列/31列)	13%(4列/31列)	0%(0列/31列)
寸法	深さ6~9×矢穴底縦幅4~7×矢穴口縦幅8~10cm	深さ4~8×矢穴底縦幅4~7×矢穴口縦幅7~9cm	深さ5~7×矢穴底縦幅3~6×矢穴口縦幅4.5~8cm	深さ13×矢穴底幅4×矢穴口幅4cm
深さ：口幅比	1:1	1:1.5	1:0.9	1:3
名古屋城(二橋2022)	I-B類?	-	-	-

直し箇所から確認されているため、後代の矢穴と考えられます。

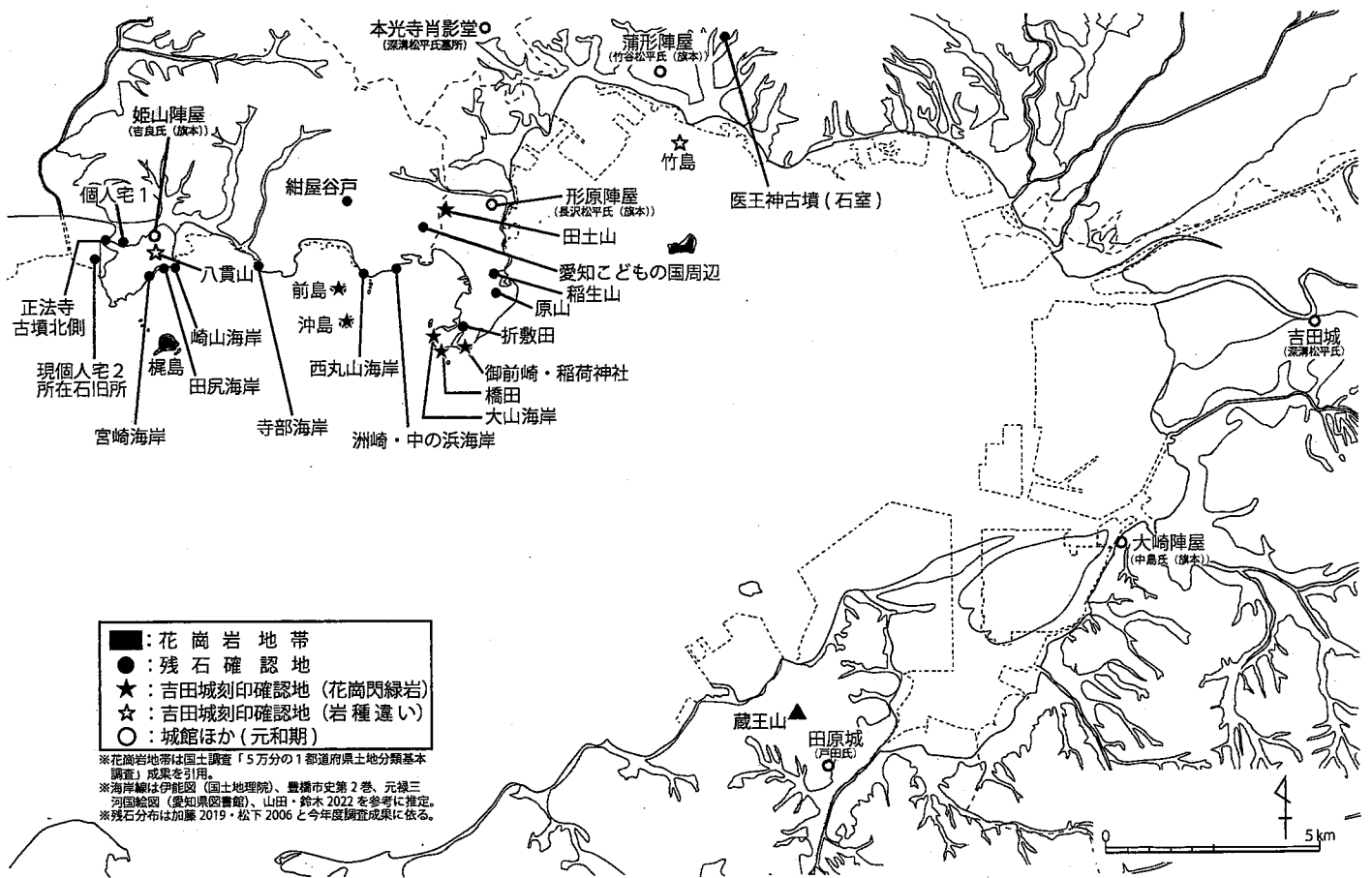
III類は昭和期以降の石垣の積み直し箇所を確認することができます。

(5) 吉田城への石材供給(考察)(第3図)

第3図で江戸時代前期の想定海岸線と残石分布、城館等を示しました。これを見ると、三河湾における残石分布は海岸と山中に分けられ、花崗閃緑岩に施された刻印I類が見られます。また、西浦半島から三河湾・伊勢湾内沿岸は機帆船で1~2日で往復できたことが記録に残ります。そのため、船で容易に搬出することができる丁場から吉田城へ石材を供給したと考えられます。

西尾市の吉良地域では斑レイ岩の残石が見られます。特に八貫山では、刻印I類が認められますが、吉田城では斑レイ岩の築石は現在確認されていません。現在は平野となっていますが、当時の周辺は入り江が入り込み、船による搬出・運搬が容易な環境です。付近に姫山陣屋があることから、吉良氏(旗本)の所領であったことが斑レイ岩が供給されなかった理由である可能性があります。つまり、吉田城へ石材を搬出するためには、搬出地の領主と吉田藩主が調整し、合意に至る必要があった可能性があります。なお、竹谷松平氏(旗本)が構えた蒲形陣屋の目の前に位置する竹島でも刻印I類が認められますが、これは角閃岩に刻まれています。島全体としては花崗岩類が見られますが、少なくとも吉田城では現状角閃岩は確認されていません。

額田郡幸田町深溝の瑞雲山本光寺にある肖影堂(松平忠利墓所)の基壇縁石・礎石の一部に、矢穴が施された幡豆石が見られます。この石材は矢穴形状と岩種から名古屋城の残石である可能性があります。吉田城については名古屋城残石を含む花崗閃緑岩を主体とする石垣を松平忠利が築いた記録はありません。しかし以上のことから、忠利が残石を利用でき、吉田城に用いることができた存在である可能性が高まりました。



第2図 三河湾北岸の残石・城館等分布図

(6) まとめ

吉田城における花崗閃緑岩の築石は、名古屋城の残石と、II-A類といった石垣構築の際に新たに割られたものもある可能性があります。また、刻印・矢穴・材質から、西尾市・蒲郡市沿岸部は名古屋城のみならず、吉田城の石丁場でもあると言えるでしょう。

引用文献

大村陸・浅岡優・高田祐一・田口一男・二橋慶太郎・井口喜景・小山圭嗣「西尾市前島石丁場調査報告」『名古屋城調査研究センター研究紀要』第6号 名古屋城調査研究センター 2025

加藤安信「矢穴石」『新編西尾市史資料編1考古』新編西尾市史編さん委員会 2019

蒲郡市誌編纂委員会「現状編 第5章 産業・経済 2 石材事業の実態」『蒲郡市誌』1974

高田祐吉「石垣刻印が語るもの」『東海道の城下町展II』二川本陣資料館 2006

高田祐吉・加藤安信「名古屋城の丁場割と石垣の刻印」『新修名古屋市史 資料編考古2』名古屋市 2013

高橋延年・柳 史郎『三州吉田城の石垣と刻印』1972

高橋延年「吉田城縄張りの一考察」『開館十周年記念特別展 吉田城と歴代城主』豊橋市美術博物館 1989

二橋慶太郎「名古屋城跡石垣における矢穴形状の基礎的検討」『名古屋城調査研究センター研究紀要』第3号 名古屋城調査研究センター 2022

松下悦男「名古屋城の築城と石の切り出し」『蒲郡市史本文編2近世編』蒲郡市史編さん事業実行委員会 2006

山田邦明・鈴木正貴「第11章中世の社会と文化～地域社会と人々の動き～ 第1節地域社会と村落」『新編西尾市史 通史編1 原始・古代・中世』新編西尾市史編さん委員会 2022

【参考】吉田城址令和3～7年度発掘調査現地説明会資料



令和3年度



令和4年度



令和5年度



令和6年度



令和7年度